

宝船たからぶね（藤野君山ふじのくんざん）短歌たんか（海老澤宏升えびさわこうしょう）

短歌

波静なみしずか七福神しちふくしんの福徳ふくとくを

運はこぶ帆ほか掛かけは宝船たからぶねなり

寿海波じゆかいなみ 平たいらかにして 紅旭こうきよく 鮮あざやかなり

遙はるかに 看みる 宝字ほうじ 錦帆きんぱんの 懸かかるを

同乗どうじょうの 七福しちふく 皆みな 笑わらいを 含ふくむ

知しる 是これ 金銀きんぎん 珠玉しゆぎよくの 船ふね

壽海波平紅旭鮮 遙看寶字錦帆懸
同乗七福皆含笑 知是金銀珠玉舟

解説 さまざまな宝物を積み、七福神を乗せた帆船といわれる宝船を詠じたおめでたい詩。

語釈 ※宝船 七宝などの宝物や七福神を乗せた帆掛け船を描いた紙の縁起物。※寿海 海。お目出たい詩なので寿海としたもの。※紅旭 赤く輝く太陽。朝日。※宝字錦帆 宝という字を大書してある錦で作られた帆。※七福 七福神。

通釈 寿海は波もなく穏やかで、朝日が真っ赤に照り輝いて鮮やかである。この穏やかな海の遙か向こうには宝の文字を書いた錦の帆を掲げた宝船が見える。その宝船に乗った七福神は皆、笑みを浮かべている。これこそが金銀珠玉の宝船である。